

O3-021

思春期の衝動性の高い自閉症スペクトラム障害を持つ患者の行動変容への看護支援 ～目標ノートを導入して～

竹澤 知夏

自治医科大学とちぎ子ども医療センター

【目的】

自閉症スペクトラム障害（以下ASDとする）児は対人関係の調整や臨機応変な対応が苦手であり、感情コントロールができず社会適応困難となる場合がある。思春期の衝動性が高いASD患者に目標ノートを使用した支援を行い、行動変容に対する有効な看護支援を検討したため報告する。

【方法】

対象患者1名のノート導入前後の入院中と外来受診時の診療記録から患者が衝動的になった場面と要因、看護支援と結果を抽出した。患者の行動とその変化、看護支援による影響を場面毎に分析し、看護支援による行動変容を明らかにした。研究者所属施設の倫理審査委員会の承認を得た。開示すべきCOIはない。

【結果】

看護支援は4の大項目、11の中項目、32の小項目が抽出された。以下大項目を【】、中項目を「」で示す。ノート導入前は【好ましい対処行動が獲得できるよう支援する】看護支援を行った。具体的には「対処行動を検討し指導する」、「取り組むべき課題を明確にし共有する」、「対処行動がとれたことを評価し成功体験を強化する」を実践した。しかし、行動変容が見られず【患者の特性に合わせて目標を可視化しセルフケア行動が獲得できるよう支援する】ためにノートの導入を行い、「目標を可視化することで患者が主体的に課題に取り組めるよう支援する」、「目標を可視化することで患者が課題を理解し取り組めるよう支援する」、「ノートを活用して成功体験の強化を図る」支援を行った。患者の行動は6の大項目と22の小項目を抽出した。ノート導入前は【衝動的な行動に至らないように自主的に対処行動を取ろうとする】【衝動的な行動に至らないように他者からの促しで対処行動を取ろうとする】【要求を通すための行動が危険行動となる】であった。ノート導入後は【ノートを活用し目標と成果を可視化することで成功体験を重ね好ましい対処行動を強化しようとする】行動から【好ましい対処行動を維持するためにノートの活用を継続する】行動に変化し、更に【ノートを活用することでイライラの要因を把握しセルフケア行動を取ろうとする】に変化した。

【考察】

ASD児の特徴に合わせ、目標と成果を可視化したことで課題の明確化や成功体験の強化につながり、患者が主体的に継続して取り組むことができたと考えられる。母子で特性と症状を理解し対処行動をとるためにノートの活用を継続したことで、セルフケア行動の獲得につながったと考えられる。

O3-022

急性脳症で入院した子どもとの間で抱く親の感覚に関する看護師のとらえ方

原 裕美子¹、奈良間 美保²¹ 奈良県立医科大学付属病院² 京都橘大学 看護学部 看護学科

【研究の背景】

急性脳症を発症した子どもと親はそれまでの親子の相互作用に変化が生じ、負担が増大すると考えられる。そこで、急性脳症で入院中の子どもの親が、発症後に子どもとの間で抱く感覚について看護師の視点から明らかにする必要があると考えた。

【研究目的】

急性脳症を発症し、入院中の子どもとの間で抱く親の感覚に関する看護師のとらえ方を明らかにし、看護師の親との関わりに対する示唆を得る。本研究における看護師のとらえ方とは、看護師が子どもと親に接する中で受けとめた親の感覚や、受けとめることに伴う看護師自身の気持ちとする。

【研究方法】

【研究対象者】

急性脳症を発症し入院中の子どもと親の看護実践の経験をもつ実務経験3年目以上の看護師とした。

【調査内容・方法】

急性脳症で入院した子どもと親の看護実践において、親が子どもに関わるなかで抱いている感覚を看護師がどう受けとめ、どのように感じていたかについてインタビューガイドを作成し、半構造化面接法によるインタビューを2022年8月～10月に実施した。

【分析方法】

得られたデータの逐語録を精読し、子どもとの間で抱く親の感覚に関する看護師のとらえ方に着目して、コード化を行なった。類似性・相違性に注目して継続的比較検討を行い、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出し、各事例のとらえ方についても分析した。全ての分析過程で小児看護研究者1名のスーパーバイズを得た。

【倫理的配慮】

京都橘大学倫理審査委員会の承諾を受けて実施した。（承認番号：21-62）

【結果】

急性脳症で入院した子どもとの間に抱く親の感覚に関する看護師のとらえ方には、216コード、23サブカテゴリー、9カテゴリーが抽出された。カテゴリーには、【いつもと違う子どもを前に、親にはそれぞれの辛さや受け入れ難さがある】、【家族らしい生活を描いて子どもと過ごしている】、【子どもの状態と一緒に親も浮き沈みしている】、【親子と一緒に自分の感情も動くことがある】、【親子とのズレや関わりに悩みながらも向き合う姿勢でいる】、【親の感情や思いがさまざまな状況や方法でなんとなく伝わってくることもある】などの内容が見られた。

【考察】

看護師は、親が発症前と様子が変わってしまった子どもに対して、複雑な気持ちを持ちながらも普段通りに関わっている可能性があることを認識し、複雑な親の感覚をありのままを受けとめ、向き合う姿勢をもつことが親子への関わりにおいて重要である。